



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 614 回 共通の絵

2015.2.1

「レンガ職人」という話、ご存知の方多いかもしれない。
コンサルティングやトレーニングでよく議論の題材に使うたとえ話である。

…レンガ職人に、通りかかった人が『何をしているのか』と聞いたところ、
以下の 3 通りの答えが返ってきた。

- A 『生活のために、レンガを積んで生計を得ています…』
- B 『一流のレンガ職人になるために、日々こうして腕を磨いています…』
- C 『多くの人々が笑顔で集まれるような、素敵な教会を建てています…』

同じ現場で同じ仕事をしていても、頭の中のイメージで見ている「絵」はそれぞれ違う。チームの仕事の成果に決定的な影響を与えるのは、目に見える基準以上に、この「各自が内面で持っている絵」の方である。

この絵こそが、細かな仕事の判断や、質に対するこだわりを決めている…

A は現実的側面を絵に描いている。当面の安定した家庭を維持することが、彼の最大の目標となっている。そのためにはひたすらレンガを積み、言われた通り、コツコツと無難にこなせば、給料がもらえる。経済的に今以上、貧することはないのである。

B は、将来を見越して自らの熟練度を高めたい。そうすればより、自分の価値は上がるはずだ。人生でも仕事でも、明確な目標をもつことが一番大切だろう。

目標を描くことで、脳は現在のこととして認識し、不確実性のものが確実性になる。

でも無作為で放任すれば、各自はマチマチに、勝手な絵を描くことになる。

たとえ話でいえば、A も B も、目指すべきは自分自身、自分のためだけの目標である。

でも C はどうだろうか？

「多くの人々が笑顔で集まれるような、素敵な教会の建設」という目標は、自分だけの幸福を目指していない。仕事を通じて誰かに喜んでもらいたい、価値を感じてもらいたいという欲求は、滞りなく給料をもらい、無難に仕事をやり終える価値観ではない。社会に貢献するために自分が尽くすのが使命だと…、実は内心みんな、それが「仕事冥利」だと感じている。

しかし内面の絵は、違っている。忙しい日常の中、目先の業務を処理する、言われたことを、言われた通りに仕上げることに終始する。つまり、つい、楽な方の絵を描きたくなる。

でももし、この絵が共有されていれば…、みんなが C を目指したかもしれない。

だから、各々勝手に絵を描くのでなく、各自が持っている内面の絵を、「共通の絵」にすることが、マネジメントで最も重要な課題であると、たとえ話は物語っている。

「我社にとっての C の視点とは何か」を明確にした「共通の絵」、いつ、どういう形で示すべきか、ベクトルが目指す方向は一つであることを、いかに気づき、納得させるか、誠に基本的命題であるにもかかわらず、まだまだ十分にできていない。

「共通の絵」のたとえ話は、その警鐘であること、改めて教えてくれるのである。